

事例番号 129 「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」  
(高知県黒潮町(旧大方町))

1. 背景

黒潮町は、高知県西南地域に位置する幡多郡の大方町と佐賀町とが 2006 年 3 月に合併して生まれた人口約 1 万 4 千人の町である。太平洋に面し、西側は四万十川が太平洋に注ぐ四万十市(2005 年に中村市と西土佐村が合併して誕生)に接し、東側は四万十町(2006 年に窪川町、大正町、十和村が合併して誕生)に接している。本稿では旧大方町で開始された取り組みを紹介するが、旧大方町は黒潮町の西側部分を占め、高知市からは西におよそ 100 キロの地点にある。人口は約 1 万人である。



黒潮町の位置 (資料: 黒潮町ホームページ)

高知県西部は高速道路が高知市方面から途中の須崎市までしか通じていないため、車では高知市内から 2 時間以上、龍馬高知空港のある南国市からは 3 時間近くかかり、国内でも有数の時間距離が長い、都会の喧騒からのがれた地になっている。そして、気候が温暖であることから(年間平均気温 17 度)、キュウリ、ミョウガなどの野菜や宿根カスミソウや鉄砲ユリなどの花卉の施設園芸が盛んである。海岸沿いの砂地の畑ではラッキョウの栽培が行われ、収穫時期の 5 月に入るとあたり一面にラッキョウの香りが漂う。ラッキョウの花の最盛期は 10 月下旬から 11 月中旬で、ラッキョウ畑はあたり一面紫色の花で覆われる。特定非営利活動法人 NPO 砂浜美術館では、毎年、この花をめぐる「らっきょうの花見」を呼びかけている。いまや「らっきょうの花見」は高知県では秋の季語ともなっている。



ラッキョウの花（写真提供：黒潮町企画振興課）

旧大方町は第1次産業の町を標榜しているが、年間の総生産額 200 億円余のうち第1次産業が占める割合は 1 割程度でしかない。太平洋に面しているにも関わらず、沿岸漁業中心の漁業は不振であり、年間生産額は 5 億円程度である。このように産業面では振るわない大方町ではあるが、反面、豊かな風景を有している。旧大方町の名所といえば「黒松 10 万本」と言われるように、入野松原と長さ 4 キロに渡る遠浅の入野海岸、通称「月見が浜」が絶景である。松原の歴史は古く、戦国時代に四国を治めた長曾我部元親も「誠に無双の景地かな」との言葉を残している。

昭和 40 年代前半まではこの場所は町民の憩いの場として親しまれ、町内外からの行楽客で年中賑わっていた。周囲には飲食店や旅館が立ち並び、ここに住む者にとっては「身の丈にあった」商業スペースであった。しかし、1972 年(昭和 47 年)に都市公園に指定されたことから、状況は一変した。計画された都市公園は、より多くの観光客を誘致し地域の経済発展に寄与すると誰もが信じて疑わなかったものであったが、その直後のオイルショックで計画は破綻してしまった。しかし、一度計画された方針は見直されず、都市公園用地確保のために飲食店や旅館は 1978 年(昭和 53 年)までに全て立ち退きを余儀なくされ、後には整備が進まない更地が出現することとなった。

飲食や宿泊ができない地に、当然のごとく人々は足を運ばなくなった。人々が近づかなくなった松原は、雑木と雑草に侵食され、まるで密林のような松原になってしまった。営林署はこれらを管理のために周囲に有刺鉄線を張り巡らせ、人々と松原との関係は完全に断たれてしまった。これらが原因であるか否かは定かでないものの、この時期を境にマツクイムシの被害が拡大し、樹齢 100 年以上の大きな松は全て枯死してしまった。以前の松原の面影は全く失せてしまったのである。この



地に遅れてやってきた「開発」は時代に合わず、結果的に失策として住民につけを残すこととなった。それでも海岸だけは昔ながらの風景を残し、春と秋の遠足シーズンには郡内はもとより愛媛県南予地方や高知市内からもバスを連ねて児童生徒が訪れることはやまなかった。



黒潮町の見どころ（資料：黒潮町ホームページ掲載図を一部加工）

1986年(昭和61年)、この長さ4キロの砂浜をコースに、全国で初めての「はだしマラソン」大会が行われた。砂浜を使ったイベントは初のことであった。これを契機に、町の資源である入野松原と砂浜を再生し再利用しなければ、という気運が町民の中に広がることとなった。そして1989年(平成元年)、二人の役場職員と高知市内のデザイナーとの出会いが、世界でも類を見ない建物のない美術館、「砂浜美術館」を誕生させるきっかけとなった。全国的にふるさと創生が叫ばれ、美術館やコンサートホール、リゾート施設などのハコモノが次々と建設されていた時代に、あえて施設をつくらず、ソフトでまちおこしをしようとの発想が生まれたのである。



八山より入野松原を望む（写真提供:黒潮町企画振興課）



「はだしマラソン」（写真提供:黒潮町企画振興課）



## 2. 目標

旧大方町のまちづくりの基本理念は「自然、人、そして時」であったが、「砂浜美術館」はこの基本理念を具体化するための重要な場となった。「砂浜美術館」は単なるイベントととらえられがちであるが、そこにはまちづくりの重要な哲学がある。「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」が「砂浜美術館」のキャッチフレーズであり、この言葉を町の哲学としてとらえたとき、町の中の資源を発見する視点が生まれる。そしてそれを暮らしや産業に活かしていくと、真に豊かで暮らしやすい町が創造できる、と町では考えている。

## 3. 取り組みの体制

「砂浜美術館」は 1989 年(平成元年)に地元の若者 9 人で構成する「砂美人連(さみつとれん)」(当初半年くらいは「さざなみ会」と称していた)が始めた。「砂美人連」のメンバーは一時は 40 人ほどになり、各種のイベントや商品開発、情報発信などを行っていたが、全てボランティア活動であったため、1995 年からは専任の事務局員を確保して日常の事務処理をすることとなった。その後業務の拡大に伴い事務局員も増員し、2003 年(平成 15 年)からは特定非営利活動法人「NPO 法人砂浜美術館」として事業の推進を図っている。これまでかかわってきた「砂美人連」のメンバーは、ボランティアの事務局スタッフとして、あるいは法人の理事として、今でも関わっている。

## 4. 具体策

「砂浜美術館」の活動のミッションは、前述の考え方を伝え、新しい価値観を創造することにある。その手段としてイベントなどの個性豊かな事業を展開している。年間活動の大半を占めるのは、「T シャツアート展」、「砂の彫刻」、「潮風のキルト展」、「漂流物展」、「ホエールウォッチング」、「らっきょうの花見」、「シーサイドはだしマラソン」等の各種イベントの実施である。これらの多くは、「観光振興事業」として町からの事業委託という形で実施している。

これらのイベントの中で最も特徴的なのが「T シャツアート展」である。1989 年に「ふるさと創生」による箱物ブームが巻き起こったが、大方町では「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」とのキャッチフレーズの下、この「T シャツアート展」を開催した。その発端は、「ものの見方を変えれば砂浜が美術館になる」という議論であった。美術館の「作品」は砂浜の回りにあるもの(貝殻、漂着物、潮紋、鳥の足跡等)との見方もできるという意見が出された。それは、「ものの見方を変えることで新しい価値観を創造する」という哲学でもあった。

「T シャツアート展」は、カメラマンの作品をプリントした T シャツを洗濯物を干すようにロープで砂浜に並べるものである。今日に至るまで毎年開催しており、作品も全国から 1,500 点以上集まるようになった。既に大方地区の名物イベントになっており、新たな集客施設を作らないまま人を集めている珍しい例となっている。

2006 年は 5 月 1 日(月)から 6 日(土)まで、大方入野の浜で「第 18 回 T シャツアート展」が開催された。町内外から数多くのボランティアがスタッフとして参加し、4 月下旬からの展示の準備(砂浜の清掃、杭打ち、T シャツ張り等)、期間中の受付、駐車場への誘導、会場の作品の管理、夜間警備、展示終了後の作品返送作業等を行った。作品は約 1,000 点集まった。町外ボランティアは 10 日間町内に宿泊し、町の人々は郷土料理等のもてなしを行った。



「Tシャツアート展」(資料:黒潮町)



「第18回Tシャツアート展」(写真提供:黒潮町企画振興課)



「T シャツアート展」の準備段階における砂浜の清掃(ゴミ除去等)では、「昔と比べて浜が狭くなった」、「少し水が出たらごみや流木が砂浜にあがるようになった」などの感想が人々の間から聞かれ、自然環境の変化を再認識する貴重な機会ともなった。参加者は、きれいな砂浜を残していかなければならないとの思いを強くしたと思われる。

作品は砂浜ではなく渚でひらひらするよう、杭打ちの場所が工夫され、訪れた人々は、青い海と空の中で自分の作品がひらひらとそよぐ姿を見て楽しんだり、たくさんの作品の中からお気に入りの作品を探し出したりして楽しんだ。期間中は「はだしマラソン大会」や「ビーサンとばし」なども行われ、人々が砂浜と交流する貴重な場となった。

「T シャツアート展」からはさまざまなイベントが派生した。「砂の彫刻」「潮風のキルト展」「漂流物展」「ホエールウォッチング」「らっきょうの花見」「シーサイドはだしマラソン」等である。これらの企画はエコツーリズムの観点からも関心を持たれるようになってきている。「T シャツアート展」「漂流物展」「潮風のキルト展」などのイベントは砂浜美術館の定番のイベントとしてすっかり定着し、町のイメージアップに大いに役立っている。またアーティストや彼らの団体と協力して企画展を実施することも行われている。



「潮風のキルト展」(写真提供:黒潮町企画振興課)

「NPO 砂浜美術館」の活動の幅は教育や観光など、他のまちづくりの分野にも広がってきている。地域の学校に出かけて砂浜美術館の活動紹介や漂着物から環境問題を考える授業を行ったり、修学旅行や研修旅行向けのガイド事業も行っている。更に近年では、広域的なエコツアーの企画や、高知県西部の総合的プロモーション活動にも力を入れている。





「漂流物展」 (写真提供: 黒潮町企画振興課)



「ホエールウォッチング」 (写真提供: 黒潮町企画振興課)



「NPO 砂浜美術館」では、砂浜美術館の考え方を伝える手段として、ミュージアムグッズを活用している。ポストカードや書籍類、「T シャツアート展」の入賞作品を商品化したオリジナル T シャツをイベント会場やインターネットで販売している。板状の流木をハガキ風にアレンジした「漂流郵便」や大型サイズの「おおがたはがき」など、オリジナリティあふれる商品の人気が高まっている。名刺やカード類のデザインも行っている。

「NPO 砂浜美術館」のその他の活動としては、漁師が自己の漁船(遊漁船登録済み)を使って鯨を見せる「ホエールウォッチング事業」の集客・配船業務がある。また、2006 年度(平成 18 年度)からは、県立都市公園の指定管理者となり、公園の管理業務も受託している。

## 5. 特徴的手法

「砂浜美術館」に関しては、「砂浜美術館はイベントの名称である」、あるいは「砂浜美術館はまちこし団体である」などと解されることがある。しかしながら、「砂浜美術館の根底はコンセプトでありイメージである。確実に存在するのは「考え方」だけである」というのが実態である。ここに、従来のまちづくりにはあまり見られない極めて大きな特徴がある。

砂浜美術館の誕生と時を同じくして欧州から「エコミュージアム」の概念が日本に持ち込まれた。これに基づいたまちづくりを進めてきた自治体も数多くある。砂浜美術館の考え方にはこれに共通する部分も多くあるが、その始まりはエコミュージアム先進地や先進事例を参考にしたわけではない。また、ふるさと創生に呼応するかのように、村おこしや地域活性化をしようという強い意気込みがあって考え出されたものでもない。

町の者とデザイナーとの偶然の出会いから派生した人々のネットワーク、そして何よりも活動に関わったメンバーがそれぞれの好きなことや得意なことを活かして地域を楽しむという遊び心、発想のユニークさと都会に媚びない姿勢で様々な事業を継続してきた結果、特に都市部で生活する人々の関心を集め、町のイメージづくりには欠かせない存在となった。

事業に関する情報は、イベントのチラシをはじめとする印刷物や雑誌、新聞、インターネットなど様々なメディアを通じて発信されている。四国の端から発信する情報に人々の心が動かされるようにするためには、コンセプトをわかりやすく伝えるイメージ戦略が必要である。そのため、「NPO 砂浜美術館」では、イメージをつくるデザイナーの力を借りて、押し付けにならないさりげなさで人々が自ら気づくような情報発信の仕方を心がけている。

## 6. 課題

砂浜美術館の考え方が生まれて 20 年近くたった。始めた頃は、「砂浜を使ったユニークなイベント」としての取材が多かった。1995 年くらいを境に、「砂浜美術館の考え方」に関する取材が増えてきた。今では、四国の片田舎になぜこうも先進的でユニークな発想が生まれ、それが 20 年近くも途切れることなく継続されてきたのか、という点に取材などの関心が集まっている。

このような外部の高い評価にもかかわらず、内なる評価に関しては、つまり砂浜美術館の考え方が地元浸透しているかという点に関しては、町によれば、採点は途端に厳しくなる。

関係者は、間接的に確かな経済波及効果をこれまでもたらしてきたと自負している。イベントの開催中だけでなく、普段でも砂浜美術館に関心を持ってわざわざこの地を訪れる人も多くいる。2000 年に京都大学大学院農学研究科が行った調査では、「T シャツアート展」のレクリエーション

価値を貨幣評価すると、総額は約 2、250 万円と算出された。来訪者がこれだけの金額を払ってでも見に来る価値があると考えているということは、地域にこれだけの経済的効果をもたらす可能性があるということでもある。

しかし、町によれば、現在はその可能性が実際に地域経済に反映される段階に達していない。遊び心や都会向けのセンスにつつまれたコンセプトは、住民にとっては理解されにくいという側面があるのも事実で、価値観に対する地域との乖離が大きな課題となっているとのことである。

一方、文化的行政の一翼を担っている「NPO 法人砂浜美術館」の活動は、公的団体等からの助成金や委託事業で成り立っており、地方財政がますます厳しくなる状況下において NPO 法人としての運営は厳しさを増している。今後は自主的な収益活動にも力を入れていく必要があるが、砂浜美術館そのもののミッションを見失わないようにバランスをとりながら進めることが課題となっている。

(参考・引用文献)

黒潮町ホームページ

黒潮町『広報くろしお』

国土交通省総合政策局事業総括調整官室『自立型地域コミュニティへの道』ぎょうせい、2004 年